連載　河北潟の仲間たち　⑨

第９回　メダカ

身近な水辺の生物の代表ともいえるメダカですが、現在では絶滅が憂慮される種になってしまいました。実際に、南関東では、野生のものはほとんど見かけられなくなってしまったようです。幸いなことに河北潟地域では、農業用水路などで、まだその姿を確認することができます。

以前、河北潟周辺の生物調査の際に、農作業をしていた方から聞いたのですが、昔はどの水路にもメダカがいて、時々その群泳を玉網で捕らえては、佃煮にして食べていたとのことです。日本に生息するもっとも小さな淡水魚が食料になる、それほどの大群が泳いでいたのです。

メダカが絶滅危惧種になった理由としては、すみかである水路が無くなったり、水草の生えない人工的な水路に改修されたりして、生息環境が少なくなったことが挙げられます。その他、地域によっては、メダカと生息場所が競合する外来種のカダヤシ（グッピーの仲間）が増えたことや、ブルーギル、ブラックバスなど魚食性の外来魚が増えたことが理由です。

河北潟でも、潟周辺の農地の圃場整備が進み、ほとんどの農水路がコンクリートの水路となったことで、水草の激減と同時に、水草のある環境を好むメダカの姿も急激に減っています。河北潟では水辺自体が無くなったわけでなく、また競合する外来種もいないので、全く見られなくなった場所は少ないのですが、少数の個体が寂しく泳いでいることが多く、「みんなで楽しく遊んでいる」といった情景はあまり見られなくなりました。

メダカには、地域ごとに遺伝的に異なる集団がいることが研究により知られています。メダカが絶滅危惧種として選定されたのは、単に全国的に一律にメダカが減っているということではなく、地域ごとに細かく分けられる集団ごとに、絶滅のリスクがあるためだと思われます。昨年改訂された環境省のレッドリスト（絶滅が憂慮される動植物のリスト）では、メダカのグループを大きく「メダカ北日本集団」、「メダカ南日本集団」に分けて、ともに絶滅危惧Ⅱ類としています。

レッドリストは、メダカの保全を考える上で、種内の遺伝的多様性と地域性に注目する必要を指摘しています。見方を変えると、メダカが現在、遺伝的多様性において危機に直面していると考えられます。絶滅危惧種に指定されたことで、ビオトープなどでメダカの飼育や放流をおこなう場面が時々見られますが、由来のわからないメダカの野外への安易な放流は、かえってメダカの危機を増大することになります。メダカは条件が良ければ増えやすい動物です。特定の種のみが増えることは、地域生態系の撹乱に繋がります。それだけに自然界へのメダカの導入には十分に気をつけるべきです。（文　高橋　久）